



ふくしまオーガニック通信

～オーガニック・ランドふくしまをつくろう～

No. 24-2

平成24年7月25日

農業総合センター有機農業推進室

<http://www4.pref.fukushima.jp/nougyou-centre/>

TEL (024) 958-1711

有機実証ほの紹介

《中通り》

農業総合センター有機農業推進室

＜オーダーメイド実証ほ 二本松市戸沢 仲里 忍さん＞

オーガニック通信24-1号でお伝えした、安達地方有機農業者組織「オーガニックふくしま安達」が参加した東京代々木公園で開催された「EarthDayTokyo 2012」での消費者交流活動の一環として取り組んだ棉の種まき体験ですが、5月20日(日)にその苗の定植作業を行いました。

当日は天候も良く、オーガニックふくしま安達の農業者メンバー及び木綿取扱業者・染織業者と連携して順調に作業は行われました。

今後は畑での栽培を続け、秋の収穫体験を目指していきます。



定植作業（仲里さんほ場）



定植作業（関さんほ場）



定植1ヶ月後の棉

<チャレンジ実証ほ 大玉村玉井 渡辺 正雄さん>

7月6日(金)、大玉村玉井・渡辺正雄さんのトマトハウスにおいて、農業短大研究科の学生2名の現地研修を行いました。

渡辺さんは就農2年目ですが、これまで順調に栽培技術を習得し、7月24日に有機JAS認定を交付されました。

渡辺さんから農業短大生へは、就農してからこれまでの苦労した点や失敗した点など、就農にあたっての貴重なアドバイスをいただきました。

これから就農を目指す農業短大生にとっては、何より有意義な現地研修となりました。



農業短大生研修 (左端が渡辺さん)

《浜通り》

相双農林事務所双葉農業普及所

浜通りの有機農業は、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により、甚大な被害を受けています。多くの有機栽培農業者が、農業経営そのものを中断して避難を余儀なくされています。

一方、有機栽培を継続している農業者や、避難区域の解除により営農を再開しようと準備している農業者も少数ながらいらっしゃいます。

放射性物質吸収抑制対策や、風評被害対策など、多くの課題が山積していますが、より多くの農業者の皆様が、有機栽培を再開できるよう、支援して参ります。そして、これらの有機実証ほの成果を浜通りの有機栽培の復興に向け活用して参ります。

<堆肥利用実証ほ いわき市久ノ浜 阿部 拓さん>

阿部氏は、堆肥の投入量の違いによる生育への影響確認を、平成22年度から実施しています。アスパラガスは施設栽培のため、原子力発電所事故による放射性物質の影響はほとんどありませんでしたが、事故により近隣での牛ふん堆肥の確保が難しくなっています。そこで、本年度は籾殻と菜種粕等による牛ふん堆肥代替の可能性について検討しています。



<チャレンジ実証ほ いわき市遠野 佐藤 吉行さん>

佐藤氏は、防草シートの効果確認を、平成22年度から実施しています。キュウリを露地栽培で作っていますが、昨年度収穫されたキュウリは、放射性セシウムが不検出でした。しかし、本年度もカリ資材とゼオライトによる放射性物質吸収抑制対策は行っています。また、防草シートによる除草作業省力対策についても引き続き検討しています。

＜チャレンジ実証ほ 猪苗代町磐里 土屋 睦彦さん＞

土屋さんは、水稻の有機栽培認定に向け、転換2年目を迎える今年、チャレンジ実証ほを設置し、チェーン除草技術の効果を検討しています。

土屋さんは、これまで化学肥料を使わず有機質肥料を使用し、農薬使用を最小限に抑えた特別栽培農産物認証米の生産を、地域の仲間と共に取り組み、その結果、第12回米・食味分析鑑定コンクール 地域品種栽培部門で金賞を受賞しました。

収量は少なくとも、安全・安心なお米を届けたいとの信念を持ち、今年から、極早生品種「五百川」の有機栽培に取り組んでいます。

土壌分析結果を参考に施肥量を調整し、ゼオライトや有機質資材の施用を行うなど、米の食味にこだわって栽培を行っています。

6月15日に田植えした時点では、病気の発生が見られ生育が心配されたところでしたが、現在は順調に生育しています。手作りのチェーン除草器を手に田んぼを駆け巡り、雑草対策も万全です。ただし、重さ20kgに達するチェーン除草器を引くのはとても体力が必要です。

現在、有機栽培に取り組んでいる様子を、自身のホームページで公開しています。



手作りのチェーン除草器

＜チャレンジ実証ほ 只見町梁取 山内 征久さん＞

現在、只見町では、昨年スタートした「自然首都・只見の恵みの推進事業」の一環として、町が有機栽培米のブランド化を目指しています。

今年度は、個人2人と1法人が合わせて63aの栽培に取り組んでいます。

このうち、山内さんは、転換2年目を迎える今年、水稻の有機栽培認定に向けて、新たにチャレンジ実証ほを設置し、紙マルチと米糠除草による技術の効果を検討しています。

実証ほは、紙マルチ栽培15a、米糠除草栽培10aの2筆の水田で、5月22日に田植えが行われました。施肥体系は、今年の秋にワラをすき込み、紙マルチ区には10a当たりイセグリーン(発酵鶏ふん)450kg、米糠区にはイセグリーン200kg、有機アグレット666を60kg、米糠80kgをそれぞれ投入しました。

紙マルチ栽培では、水温や地温が低くなるため、南会津地方では実施が困難とされていましたが、昨年、試験的に導入したところ、生育に影響がなく除草効果も確認されたことから、今年は、他の生産者も紙マルチ栽培を導入しています。

今年、山内さんの実証ほを通して、生育への影響を含め様々な視点から検証していきます。



紙マルチ栽培による田植え

各地域からの話題

《会 津》

会津農林事務所農業振興普及部

○ 「会津自然塾」主催による消費者との交流会！

さる6月30日(土)、会津美里町本郷関山地区で、有機生産組織「会津自然塾」主催による交流会が開催され、組織会員や交流のある消費者等85名の参加により、盛大にイベントが行われました。

今回は、「ホテル鑑賞会」と銘打って、宅配事業を通じて交流のある消費者を対象に企画し、イベント内容のチラシを作成配付するとともに、インターネットを活用して幅広く呼びかけた結果、会場に入りきれないほどの大盛況となりました。

当日は、会員の有機野菜ほ場で収穫体験が行われ、続いて料理研究家の朝倉玲子さんより学んだ有機野菜の素材をそのまま活かした料理法で、イタリアン軽食

(写真参照)を作り、交流会で振る舞い

ました。参加者からは、「とても新鮮で素材が生きている」「とても美味しい」などの評価を頂きました。中でも特にニンジンは、人気No.1でした。

また、会員と参加者が一緒に歌ったりして一体となり、とても楽しいひとときを過ごすことができました。

辺りが暗くなったところにホテルが光り始めると、参加者は神秘的な美しさに感動し、自然の豊かさに感謝していました。同地区は、十数年前から水辺の環境の美化活動に取り組んできており、ホテルをはじめ、水辺の生き物も年々数が増えていることから、環境を大切にしたい組織の活動を象徴するイベントとなりました。



「会津自然塾」鹿野代表から会活動の紹介



有機野菜を使い、素材を活かした「イタリアン軽食」を作った

○ 双葉地方の水田でアヒル、アイガモの活躍再開！

双葉地方では、東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響で、多くの農家の方々が避難を余儀なくされるとともに、水稲の作付ができない地域も多く、残念ながらまだ水稲の有機栽培は再開されていません。

しかし、有機栽培でも活躍していたアヒルやアイガモが、広野町と川内村の特別栽培や試験栽培の水田で活躍を再開し、元気に水田を泳いで雑草や害虫を防いでくれています。

その愛らしい姿は、帰還し復興に取り組んでいる住民の方々の気持ちを癒やしてくれているようです。

今後、モニタリング調査や米の全袋検査等に取り組み、水稲の有機栽培の再開を含め、安全・安心な農畜産物の生産ができるよう、そして、多くの水田で、アヒルやアイガモのかわいい活躍が見られる日が早く来るよう努めて参ります。



アヒル（広野町）



アイガモ（川内村）

新規就農研修（有機農業）始まる

農業総合センター有機農業推進室

今年度も、農業短期大学校研修部による新規就農研修（有機農業）が、6月7日から10月に掛けて計5回実施されます。

6月7日（木）の第1回目は、参加者が3名でした。午前中は松下有機農業推進室長により、「有機農業とは」というテーマで講義が行われました。

午後は「ボカシ肥料の作り方」の実習を行いました。説明の後、米糠・菜種油粕・魚粕に水を加えてよく混ぜ、小山状にしました。その後、場内の有機ほ場を見学しました。

今後は、水稲や野菜の管理作業や農家視察、認証制度の講義を受ける予定です。



講義を受講中



ボカシ肥料作り

「有機農業活用！6次産業化サポート事業」における有機農産物の販路開拓・確保等の業務委託について、公募により委託先が株式会社自然農法販売協同機構に決定し、同機構の南埜専務取締役役に、今年度、オーガニック・コーディネーターとして、御活躍をいただくこととなりました。

南埜氏からメッセージをいただきましたので、御紹介いたします。

○オーガニック・コーディネーター
株式会社自然農法販売協同機構

みなみの ゆきのぶ

専務取締役 南埜 幸信 氏



○オーガニック・コーディネーター南埜氏からのメッセージ

平成24年度の福島県オーガニック・コーディネーターを拝受いたしました、(株)自然農法販売協同機構の南埜 幸信と申します。

平成22年度に引き続き、2年目の任に当たらせていただきます。よろしく願い申し上げます。

昨年の3. 11の原発事故以来、福島県の農業と有機農業は、過去にない大きな試練に直面しています。

放射性物質の監視の継続とその情報公開と作物への移行の低減のための取り組み、そして風評被害との闘い等、太平洋戦争での広島・長崎の原爆投下以来の、未曾有の歴史的課題を突き付けられています。

先祖から預かった貴重な農地と、多様な食べ物を生み出してきた福島の豊かな自然環境が、放射性物質による重篤な汚染をうけてしまったことは、決して東京電力からの金銭的な補償を受けるだけで解決する問題ではありません。

これは、私たち福島県の農業に関わるもの全てのものが、共通の課題として、未来の日本に向けて解決していかなければならない問題ということです。

このことを肝に銘じ、私自身も私の問題として受け止め、また、私の周りの多くの青果流通に関わる人たちに対しても、日本全体の問題として、真正面から受け止めて、ともに力を合わせて乗り切っていこうと、訴え続けていく所存です。

首都圏では、日本復興と福島復興を願う若者がボランティア組織「福島きずなプロジェクト」を立ち上げ、私たちと連携を始めています。

また、(株)らでいしゅぼーやとの連携で、MR. CHILDRENや、坂本龍一氏らが立ち上げた環境と農業を考える組織である「AP BANK」が、コンサートで福島の有機農産物の即売に取り組んでくれています。

福島の未来なくして、日本の未来がない。

私も福島のオーガニック生産者の方々とこの志で、今年1年取り組んでいきたいと思っています。

原発事故から1年以上経った現在も、スーパーマーケットの対応は2分化されています。

「福島を応援して、どんどん販売するよ」という企業と、「たとえ放射性物質がNDであろうと、福島県産の農産物は一切仕入れをしない」という企業とが、真っ二つに分かれています。

この状況を正直に皆様に報告し共有しながら、私たちの未来を力を合わせて創りだしていくことのできる方々を、福島に繋いでまいります。

よろしく願い申し上げます。